

○縄文時代の竪穴住居跡の分布（中期末葉～後期初頭：約4500～4200年前）

第11次調査で1棟見つかりました。これまでの調査の累計は、確実なものが14棟確認されています。円形に竪穴を掘った住居跡で、床面の中央に土器を埋設したり石を配置した炉を有しています。分布は台地中央の高台から西側にかけて広がっています。北側の緩斜面や台地の南側にはほとんど分布していません。

○平安時代の竪穴住居跡の分布（9世紀中葉～後葉：約1200～1100年前）

第11次調査で4棟見つかりました。これまでの調査の累計は、確実なものが13棟確認されています。方形に竪穴を掘った住居跡で、東壁や南壁にカマドを有しています。カマドで火を焚くことによって発生した煙は地下の煙道を通して、屋外に排出されました。分布は台地の全域に広がっています。縄文時代の竪穴住居跡と違い、北側の緩斜面や、南側の台地の縁部にも広がっています。

○中世館跡の堀と土塁（16世紀ごろ：約500～400年前）

八天遺跡は、中世には「下欠野館（しどかけのだて）」と呼ばれる館跡（たてあと）でした。和賀氏が北上地域を統治していた時代の山城跡で、外敵の侵入を防ぐための堀や土塁が設けられました。第11次調査ではこの館跡の外堀と土塁が再確認されました。



縄文時代の竪穴住居跡（令和2年度）

配置図イ



平安時代の竪穴住居跡（令和6年度）

配置図ロ



中世館跡の外堀と土塁（令和6年度）

配置図ハ



同上 カマド

八天遺跡の竪穴住居跡（配置図）

